様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　３月３１日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2009～2010
課題番号： 21820057
研究課題名（和文）近代日本立憲制の成立と政党認識―「欧化」と「反欧化」の視角から―

研究課題名（英文）Thoughts on Political Parties in Meiji Japan -Westernization and Anti-Westernization

研究代表者
真辺　将之（MANABE MASAYUKI）
早稲田大学・大学史資料センター・助手
研究者番号：80546721

研究成果の概要（和文）：
平成２１年度は、帝国議会開設以前における政党認識に関する史料の収集ならびに分析を行った。また平成２２年度は、帝国議会開設後における政党認識に関する史料の収集作業ならびに分析をおこなった。議会開設以前の政党論は、欧米からの政党論の導入とそれに対する日本の側の反発あるいは修正に留意して研究を進めた。また議会開設後は、現実の政治過程との呼応関係を意識して、政治史的史料の収集・分析を重点的に行った。以上の結果、今後の研究活動を行っていくうえでの貴重な情報を蓄積することができた。

研究成果の概要（英文）：In 2009 I researched about political thoughts before the establishment of Imperial diet, and in 2010 after the establishment. I also collected a number of historical materials in this two years. Regarding the former I analyzed how Japanese people repulsed or modified political theories of Europe and USA. Regarding the later I analyzed the relation between political thoughts and real Politics. As a result, I could learn a lot of useful information about thoughts on Political Parties in Meiji Japan as a foundation of future research.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成２１年度	1,080,000	324,000	1,404,000
２２年度	970,000	291,000	1,261,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,050,000	615,000	2,665,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：政党　近代化　欧化　反欧化　立憲制

１．研究開始当初の背景

研究代表者が「欧化」と「反欧化」という視角から「政党」に着目したのは、第一にそれが本来的に西洋をモデルに取り入れられたものであるということからである。

そもそも、「政党」とは前近代の日本には存在しなかった外来のものである。その外来の「政党」が日本に根付くためには、それが「外来のもの」であるという意識自体が克服され、起源の如何にかかわらず、日本の社会にとって有用であるという認識を得ることが必要である。言い換えれば、欧化主義者であれ、国粋主義者であれ、誰もが政党の有用性・必要性を認識しなくては、政党の社会へ

の定着はありえないのである。
　このように、政党というものは、「欧化」と「反欧化」とのせめぎあいと、そこから生まれてくる日本の近代の特質を理解する上で、格好の対象であるということができる。以上の理由から、「欧化」と「反欧化」の視角から近代日本の政党認識を検討しようと考えた。

２．研究の目的
　本研究の目的は、「欧化」と「反欧化」とのせめぎあいを経て、そうしたせめぎあいを脱却し、政党が議会政治に不可欠の存在として定着していく過程には、日本の歴史的状況のなかにおいて、いかなる特質を見出すことができるのかを明らかにすることにある。
　近代日本が議会政治を導入するにあたっても、政党は必ずしも自明の存在ではなく、議会政治の基礎は政党が担うべきだという意見が西洋を参照例に主張される一方で、政党に対する批判的な意見や不信感も根強く存在しており、政党が日本社会に根付くに至るまでには、政党の導入は数多くの軋轢を経なくてはならなかった。
　とりわけそうした軋轢のなかでも、近世以来根強く続く「徒党」を忌む伝統的な価値観や、天皇親政というものが日本特有の政治形態であるとする価値観などが、政党の日本への導入への大きな障壁となった。さらに、「欧化」を唱える者の側でも、ドイツなどを参照例に政党の弊害と官僚主導の政治形態を主張する者や、逆に「反欧化」の立場であっても、例えば鳥尾小弥太が「保守党中正派」という政党を結成したように、政党の有用性を西洋からの輸入概念としてではなく、儒教的な概念から主張する人物も登場するに至る。
　このように、政党認識をめぐる「欧化」と「反欧化」とのあいだのせめぎあいは、複雑多岐な様相を示していた。このようなせめぎあいの中、官僚・政党人・ジャーナリストなど、直接間接に政治に携わった人々が、いかなる政党認識を基に、どのような政党とのかかわり方をしたのかということを明らかにすることを本研究の目的として定めた。

３．研究の方法
　考察にあたっては、人々の政党認識を対象とする思想史的手法を基軸として、明らかにしていく。
　ただし人々の政党認識は、いうまでもなく現実に存在する政党との呼応関係において存在しているのであり、政治史的状況を抜きにした思想史分析では、理念と現実政治との間の中で動く歴史のダイナミズムを描き出すことが出来ないと考える。
　そこで、政党認識を思想的に分析する一方で、現実の政党の政治史的な動向にも注意を払い、知識人のみではなく、官僚や政党人をはじめ実際に政治に携わった人々を対象に加えて、理念と現実との間で揺れ動く歴史のダイナミズムを明らかにしたい。
　本研究は、これまで研究の乏しい政党認識の思想史的研究を切り開くという意味において学術的意義を有するとともに、ともすれば政治史と思想史とが没交渉に行われがちな日本の近代史研究において、単に思想史研究の枠内に止まらず、思想史と政治史との橋渡しを行おうという意味においても、大きな学術的意義を有していると考える。
　また研究対象としては、さしあたってこの二年間の研究では、明治 33 年の立憲政友会設立以前の時期に検討対象を絞り、①議会開設以前に、西洋からいかなる形で政党概念が導入され、またそれに対するどのような反発や批判が生じたのか、②議会が開設され実際に政党が活動の足場を得ることによって、人々の政党認識がいかなる形で変容していったのか、という二点を考察することとし、以後の申請者の研究の起点（スタートアップ）にすることとしたい。

４．研究成果
　平成２１年度は、議会開設前夜における政党認識に関する検討作業を行った。
　具体的には、①西洋を論拠に政党を肯定的に捉える議論、②西洋を論拠に政党を否定的に捉える議論、③伝統思想や欧化主義批判を背景に政党を否定的に捉える議論、④伝統思想や欧化主義批判を唱えながら政党を肯定的に捉える議論の四つのグループに分けた上で、それぞれのグループに属する人々の政党認識を、（１）「政党」とはそもそも何なのかという政党概念の問題、（２）政党が政治機構・政治過程においていかなる位置を占めるべきだと考えていたのか（たとえば政党内閣制を主張していたか否かなど）という政党の政治的役割の問題、（３）そのために政党はいかなる組織を持ち社会といかなる関係性を有するべきかという政党組織の問題、という三つの要素を中心にして分析した。
　その成果の一部は、研究代表者が編者の一人となって編んだ研究書『近代日本の政党と社会』に収載された論文「政党認識における欧化と反欧化」として発表した。この論文は、幕末から議会開設前夜に至るまでの政党論を題材に、近代日本の政党認識の特質を明らかにしようとしたものである。その要旨は以下の通りである。
　幕末期には全く理解しがたい異文化であった「政党」は、明治になり、日本の西洋化すなわち「欧化」が至上命題となるにいたって、「欧化」の一環として、まずは民権派によってその導入が主張されるが、逆に明治政府の側は、同じく「欧化」の論理にのっとっ

て、西洋における政党の害悪を論拠として、そうした民権派の議論を牽制した。

こうしたなか、明治一〇年代後半になって「欧化」の行き過ぎへの疑義が提示されることになる。しかし、「政党」もこうした「欧化」への批判と同時に否定されることになったかといえば、事はそう単純ではない。同じ「反欧化」の立場に立ちながら、鳥尾小弥太は政党の重要性を強調して「保守党中正派」という政党を組織し、逆に谷干城は政党に対して拒否感をあらわにし続けた。二人の政党認識は全く対照的な論理に拠っており、日本の国家としての特殊性・優越性を主張する鳥尾が、政党の必要性を、西洋を全く引き合いに出さない儒教思想の論理の枠組みのなかで主張するのに対して、谷は西洋の社会状況を日本よりも進んでいると捉えるが故に、かえって日本における政党の設立を尚早であると主張するという一種のねじれ現象が生じていた。

しかしそうした主張の相違が存在する反面で、両者ともに、「公党」の存在を是とし、現実の政党が「公党」たりうるかどうかという視点に立って、日本における政党設立の可否を論定しているという点では同一の地平に立っていた。そしてこうした「公党」を是とする価値意識は、戦前の日本において、共通して見られる政党論の基調でもあった。近世以来の「徒党」に対する嫌悪感が根強く存在するなかで、こうした「公党」の強調は、「政党」の公共性を強調してその定着に一役買うことになる。しかしその一方で、こうした公共性を過度に強調することが、昭和期に入って政党の腐敗・堕落に対する批判が高まってきた際に、政党批判が政党のあり方を改革しようとする方向にではなく、政党の存在そのものを否定しようとする方向に進んでいったひとつの大きな原因ともなるのである。そのことは、西洋の政治学において、その後政党の存在が公共性の軛から放たれようとするのに対して、日本の政治学においては、少なくとも戦前において、そうした議論が例外的にしか存在しえなかったということにも端的にあらわれているということができるのである。

以上のように、研究代表者はこの論文において、明治初期における政党導入のありさまを、西洋の政党論との比較をまじえながら解明し、近代日本における政党論の特質を明らかにすることができた。

また平成２１年度の成果として、他には、高知県立図書館および高知市立自由民権記念館に資料調査におもむき、自由党土佐派に関連する資料を収集した。また国立国会図書館、宮内庁書陵部、早稲田大学図書館所蔵の関連史料についても資料調査・収集を行った。また早稲田大学文学部所蔵「深谷博治旧蔵文書」のうち、政党に関連すると思われる部分について、アルバイトを雇用して整理・調査・データ入力を行うとともに、次年度以降の研究に向けて、議会開設後の政党に関する史料の収集も積極的に行うことができた。

平成２２年度は、議会開設後における政党認識に関する検討作業を行った。

議会開設以前の政党論が、西洋を多く参照例にしてなされたり、それに対して日本の政治体制の特殊性や日本の実情などを論拠にして反論がなされたりする傾向にあったのに対し、議会開設後は、何よりもまず現実に議会において活動している政党に対する価値判断を出発点として議論がなされることになる。

したがって平成２２年度は、議会開設前に見られた政党認識が、実際に政党が議会での活動を行っていく過程で、いかなる変容を遂げるのかということを、（１）議会における政党の活動のあり方がどのように評価され議論されたのか、（２）そうした現実の政党に対する議論がなされる際に、西洋の政党モデルはいかなる形で参照されるようになるのか、（３）また逆に、日本と西洋との政治・社会状況の違いという要素は、現実の政党のあり方を議論する際に、どのように援用されることになったのか、という観点から分析を行った。

特に、「欧化」の側に位置する大隈重信および立憲改進党以降のいわゆる大隈系政党に属する人々の政党認識については力を入れて検討し、その成果の一部は、「大隈重信・大隈系政党の政党内閣論と天皇・宮中」として研究会にて報告することができた。

本年の研究内容については、いまだ活字化されていないが、今後論文あるいは書籍の形で発表することを目的として現在執筆を進めている。

また大隈および大隈系政党以外の政治勢力に関しても史料収集活動を精力的に行った。史料収集としては、高知県立図書館および高知市立自由民権記念館に出張資料調査におもむき、自由党土佐派および国民派に関連する史料を収集することができた。また国立国会図書館、宮内庁書陵部、早稲田大学図書館所蔵の関連史料の収集、早稲田大学文学部所蔵「深谷博治旧蔵文書」のうち政党に関連すると思われる部分についての整理・調査、さらに古書籍や新聞雑誌等のメディアに掲載された政党論について調査・収集を行うことができた。

これまで歴史学の分野において、「政党認識」を正面から取り扱った研究は非常に少なく、その意味で大きな意義を持つ成果をあげえたと考える

また今後の課題として、海外における政党認識の歴史的変遷との比較研究を行ってい

くことが必要であると考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計１件）
① 真辺将之、大隈重信・大隈系政党の政党内閣論と天皇・宮中、「宮中と政治」研究会、平成２３年２月２５日、早稲田大学津田記念室

〔図書〕（計１件）
① 安在邦夫、真辺将之、荒船俊太郎編著、日本経済評論社、『近代日本の政党と社会』、平成２１年１１月、全４２４ページ

６．研究組織
(1)研究代表者
真辺　将之（MANABE MASAYUKI）
早稲田大学・大学史資料センター・助手
研究者番号：80546721